

第4章

授業改善のためのアンケート調査結果

本学が自己点検・評価を行い、その結果を「北に一星あり」によって報告し始めてから、すでに第7集を数えている。さらにまた近年になって急速に高まってきた大学評価への要求に応じて、本学でも学内評価体制の一層の整備が進行しているところである。この章では、大学評価を構成する諸項目の中で、とくに学生を対象とした教授法の改善を目的とするアンケート調査に焦点を置いて、これまで実施してきた調査から得られているデータを用いて、その間の改善努力がいかなる成果を上げているかを時系列的に検証してみたい。教育課程改善委員会は、従来から授業の改善に向けて教官を支援する体制の整備に努めてきた。その中心となってきたのは、そのような委員会の意向の下に実質的な計画と業務を遂行する「FD専門部会」であった。それゆえ、これから明らかにしようとする授業改善の成果は、個々の教官の努力の成果であるのはもちろんのこととして、学内の授業改善努力を支えてきたこの部会の貢献によるところが大きいことをまず最初に指摘しておかなければならない。

授業方法の改善に向けての自己評価委員会の取り組みは、具体的な形としては「授業改善のためのアンケート調査」に表れている。この調査は、平成9年度から開始され、その結果は「北に一星あり」の第4集から今日まで継続的に報告されてきている。アンケートの実施は、当初、教官の自発的な裁量に任されていたのであるが、平成11年度において質問内容の変更と整理がなされ、さらに調査に参加する教官の大幅な増加が実現した。それゆえ、ここではこの年度以降の3年間におけるアンケート調査からのデータによって、その間の学生による授業評価の変化を追うことにする。

「授業改善のためのアンケート」の質問項目は、「共通型」および「個別型」と呼ばれる2種類に分けて実施されてきた。ここで「共通型」とは、授業全般に関する学生の評価と要望を知ろうとするものであり、「個別型」とは、各教官の担当する個々の授業科目について、聴講学生から授業改善のための示唆を得ようとするものである。後者はさらに「講義科目」、「語学科目」および「実技実習科目」に分けて実施されている。ここでは、これら一連のアンケートの中からとくに「個別型」に属する「講義科目」区分の回答から得られているデータを取り上げることにする。大学における教育の主要な部分は講義形式による知識の伝達によって占められていて、本学においても調査に参加した授業科目と回答の大半がそこから得られている。それゆえ、この調査区分の評価結果を明らかにすれば、それによって本学の全体としての授業改善の一般的傾向が推測できるであろうと思われるのである。

平成11年度と平成12年度のデータは、「北に一星あり」の第6集と第7集に掲載の報告書から得ることができる。平成13年度のデータは、この第8集に掲載されている。以下の分析は、そのうちの「授業科目」を受講した昼間と夜間主の学生から得られた回答に基づいている。この部分の要約統計量は、これまでの報告書では独立して提示されていないから、ここでは「授業科目」に該当する

部分を特別に抽出しなければならなかった。

まず、総講義科目数とアンケートを実施した科目数ならびにその比率を計算し、さらに聴講学生による回答数と回収率の推移を見てみたい。報告書では「講義科目」のみを分離した回収率は計算されていないから、ここでは個別型の全体としての回収率を示すことにしよう。開講科目の延べ数は、平成11年度は360であり、そのうちのアンケート実施数は261となっているから、実施率にして72.5%になる。同様にして、平成12年度においては、総授業科目数は381であり、実施科目数は301であったから、実施率は79.0%になる。平成13年度においては、それぞれ413と333であったから、実施率は80.6%となった。ついで、全講義科目を対象として学生の回答率を年度を追って計算すると、表1に見られるように、平成11年度は24.5%、12年度は27.7%、13年度は33.8%となっている。

表1：アンケート回答数と回答率の推移

	履 修 者 数	回 収 数	回 収 率 (%)
平成11年	39,736	9,722	24.5
平成12年	43,508	12,067	27.7
平成13年	37,560	12,690	33.8

全開講科目について、履修者数に占めるアンケート回答者の比率は、この表に見られるように低い数値しか示していない。しかしながら、これらの低い回収率によって、ただちに調査結果の信頼性が疑問視されるわけではない。なぜなら、まず各年度の開講科目の総数のうち、アンケートを実施した授業科目の割合がきわめて高いことが指摘できるからである。科目数に関する実施率は、さきに計算したように3年間を通じて次第に増加して7割強から8割に達しようとしているから、開講される授業科目のほぼ全体をカバーするようになっている。他方、確かに聴講学生からの回答率はきわめて低いといわざるをえないのであるが、これに関しては聴講生が調査質問紙を前に回答を拒否したということ以外の理由を挙げることができる。その1つのおおきな理由として、回答率の計算の出発点となる履修者数の算定がある。履修者数は履修登録に基づいて計算されているから、履修届を提出したけれども、途中で単位取得を放棄した学生がそれに算入されている。また、アンケート実施時に欠席した学生もいたであろう。単位取得の断念および出席率それ自体も教官の授業評価の評価基準に含まれるであろうが、任意選択科目と選択必修科目の相違や、その他の教官の管理不能な要因も作用しているはずである。それらの要因をあらためて検討して対処する必要があるであろうけれども、さしあたりそれらの要因を教育業績の評価から外すことができるとすれば、低い回答率をもってそのまま調査の信頼性を否定することにはならないと思われる。実際、後に触れるように質問紙の中に授業の出席率についての質問が含まれていて、そこでは回答学生の出席率はかなり高く評価されているのを見れば、回答者の多くはまじめに授業に出席してきた学生であると推測できるのである。

表2に示しているのは、講義科目に関してこれまでの3年間に渡って実施されてきた調査から選択された21の質問項目別の平均評点の一覧表である。それらは3年の間に生じた傾向を見るのに適していると思われる項目から成っている。各項目は5つの評点をもつ尺度上で受講者に評価を求めている。たとえば、「あなた自身の学習態度は、全体としてどう評価できますか」の質問に対して、評価選択肢として、1.非常に意欲的であった、2.かなり意欲的であった、3.どちらともいえない、4.あまり意欲的でなかった、5.まったく意欲的でなかった、とする5つが与えられている。表中の各年度の数値は、それら5つの評価点のうちの積極的な評点である、「非常に意欲的」と「かなり意欲的」の2つのいずれかを回答した受講者がその質問項目の回答者総数に占める割合である。他の質問項目についても、同様にその質問項目の回答者の総数のうち、積極的な評価を与える上位2つの評点を選択した回答者の割合を示している。

最初に、質問項目のⅢの(1)、(3)および(5)は、受講生の学習態度について尋ねている。これらの項目の回答から分かるのは、まず回答者の講義への出席率が高く、いずれの年度も平均して80%を越えていることである。ただし講義には出席しても、それ以外の時間で予習・復習を行う学生はきわめて少数である。また、自らの学習態度は比較的肯定的に評価していることである。

質問項目のⅣ(1)からⅣ(11)までは教師の講義内容についての評価を求めておりⅤ(1)からⅤ(5)までは、教授方法に関する質問である。平成12年度に質問項目の手直しが施されたために、いくつかの項目で継続性が失われてしまった(欠損データは表中ではNAとしている)。しかしながら、その他の項目の評点の経過は、すべてに渡って年度を追って向上を見せている。とりわけ教授方法に関する評点が顕著な上昇を示しているのは注目に値する。この全面的な指標の改善は、本学における授業改善の努力が着実な成果を上げている証拠となるであろう。結果としての授業に対する聴講学生の満足度も、質問項目Ⅵ(1)とⅥ(2)の評点に見られるようにはっきりとした改善傾向が見てとれる。

3年間の時系列比較によって、たとえまだ満足な水準ではないとしても本学の教育面での質的向上は着実な改善の方向にあることは明らかである。学生による教官の授業方法と内容の評価とそのフィードバックが1つの刺激となって、教育活動の一方の主体である教官の側での意識の高まりがこのような成果をもたらしたと解釈できよう。しかしながら、いくぶん懸念されるのは学生の学習態度である。さきに述べたように、回答した学生の80%以上が全講義に100%あるいは80%以上出席したと答えている。また、自分の学習態度は、その40%以上が「きわめてまじめであった」、あるいは「かなりまじめであった」と回答している。その限りでは好ましいのであるが、実際の学習行動に関しては、全体の9割を越える学生が予習あるいは復習をまれにしか行っていない。まじめに講義に出席しているにもかかわらず、全体的に自発的な学習意欲を欠いているようである。したがって、積極的な学習への導く動機付けが必要なように思われる。教官の側でのより一層の改善工夫と平行して、本学による教育活動の成果と社会的評価をいっそう確かなものにするために、学生の学習意欲を喚起するなんらかの工夫が今後の課題となるであろう。

表2：講義型授業の改善傾向

質 問	平 成		
	13	12	11
Ⅲ (1) あなたはこの講義にどの位出席しましたか。100%出席と80%以上出席の合計。	85.9	82.5	84.0
Ⅲ (3) 講義の予習または復習として、講義時間以外の学習を行いましたか。毎回とほぼ毎回の合計。	8.1	7.2	8.2
Ⅲ (6) あなた自身の学習態度は、全体としてどう評価できますか。	41.0	38.7	N A
Ⅳ (1) 講義内容は当初の授業計画に沿ったものでしたか。	87.8	87.2	86.3
Ⅳ (2) 講義内容はよく準備されたものでしたか。	82.5	79.0	N A
Ⅳ (3) 講義内容は理解しやすかったですか。	61.6	57.3	N A
Ⅳ (4) 教師は講義内容に興味を持たせる工夫をしていましたか。	60.6	64.6	N A
Ⅳ (5) 教師は学生の質問に丁寧に答えていましたか。	61.5	61.9	N A
Ⅳ (6) 教師は熱意を持って講義をしていましたか。	75.3	72.6	N A
Ⅳ (7) 講義内容は知的関心を高めてくれるものでしたか。	65.6	61.8	N A
Ⅳ (8) 教師は新しい研究動向を講義に盛り込む努力をしていましたか。	57.8	55.3	54.7
Ⅳ (9) 履修前に比べて、この科目の内容に関心を持つようになりましたか。	60.1	58.4	N A
Ⅳ (10) 講義の進度は適切でしたか。	65.6	62.9	N A
Ⅳ (11) この講義の内容は卒業後役立つと思いますか。	57.1	55.8	N A
Ⅴ (1) 教師は学生が講義に集中できるような教室環境を保つ努力をしていましたか。	62.0	59.4	N A
Ⅴ (2) 教師の話し方は明快でしたか。	68.7	65.9	62.3
Ⅴ (3) テキスト、プリントの使い方・説明は適切でしたか。	60.8	61.9	58.6
Ⅴ (4) 黒板、OHP、ビデオ装置等の使い方は適切でしたか。	56.6	51.6	50.0
Ⅴ (5) 教師は学生の反応を見ながら講義を進めていましたか。	56.9	56.5	50.2
Ⅵ (1) この講義から多くのことを学びましたか。	68.5	65.3	N A
Ⅵ (2) 総合的に判断して、この講義にどの程度満足できましたか。	62.0	58.9	55.0